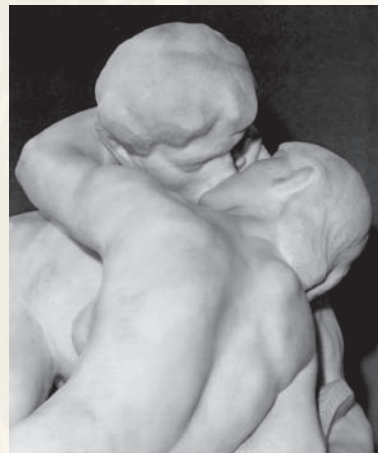


オペラ「ムツェンスク郡のマクベス夫人」は サスペンスドラマだ

文：田辺とおる ボリス役で出演



シヨスタコーヴィチ作曲の「ムツェンスク郡のマクベス夫人」を制作しているんだ。日本人初のロシア語舞台上演なんだよ、と最近あちこちで宣伝している。大抵は、「そんな難曲やるの?!」とびつくりしてくれる。シメシメ。宣伝はインパクトが第一だ。難曲、には違いない。「モーツァルトだって単純故に難曲だ」という一般論は脇に置いて、そりゃ二十世紀音楽のシヨスタコーヴィチをロシア語上演するのだから演奏者にとっちゃ難曲だ。間違いない。

一方で「ようやくそういう時代になった」という喜びと期待の声も届いて、大いに励まされている。もともとシヨスタコには熱狂的マニアが多い。彼らには、シヨスタコの音楽に辿り着く様々な動機があるようだ。文学から・近代音楽から・ロシアへの興味から・政治や社会現象から……。シヨスタコ自身の複層的でパラドックスに富んだ人格が反映するのだろうか。ワグナーと並んで、インテリがそえられる作曲家のトップクラスだろう。ところが日本人のオペラ上演記録は乏しく、七〇年代の日本語上演（但し改訂版）と、九〇年代の演奏会形式公演しかない（ケルンやキーロフのオペラ来日公演では話題になったが）。ヨーロッパにおける高い関心や熱狂の度合いと

の温度差は大きい。だから「ようやく……」と受け止められることは、誠に我が意を得たり、だ。

実際、ヨーロッパでこの曲の評判は凄い。各地の劇場にかかる度に話題沸騰するし、何種類もDVD・CDが出ている。楽しいウイーンオペレッタの総本山、あのフォルクスオーパーでさえもこの曲を出し、僕の師匠も出演したから観に行つて度肝を抜かれた。

しかし、インテリがそえられるから、だけではこうはならない。これは非常に面白いオペラなのだ。シエークスピアのマクベスと直接の関係はなく、欲に溺れて殺戮を繰り返す主人公をマクベス夫人にたとえたものだ。そのストーリーが、刺激的な音楽に彩られてサスペンスドラマのように展開する。精神性・メッセージ性・プロバガンダ色なども無視できない一面だが、そんなことへの理解以前にテレビの二時間ドラマ感覚で見られる、現代的で身近なオペラだ。だって、こんな筋ですよ。「欲求不満でムンムンの若妻が、浮気現場を抑えられたために舅と夫を相次いで殺害。ところが死体遺棄の不手際から密告されて逮捕。シベリア送りの囚人収容所で情夫は他の女に浮気。思い余ってその女を殺し自分も身投げ」。

「その湖は私の良心のように真つ黒……」と、ヒロインのカテリーナは終幕で絶望のモノローグを歌う。

音楽も凄い。オペラでここまでやるのか?!という曲だ。民謡からウィーンナーワルツまでをパロディーで入れ込み、ロマンティックなフレーズにも軽快なリズムにも事欠かない。混沌とした無調作品の「現代音楽」ではないが、彼一流のスパイスが効いて、音楽が雄弁にドラマ進行を際立たせている。



こんなシーンまである。使用人セルゲイと深い仲になってしまう瞬間。最初は抵抗しているカテリーナが、音楽の高まりと共に「イヤヨイヤヨ」転じて「イイワイイワ」。感極まった二人の絶叫から、オーケストラは両者のセックスを克明に描写する間奏曲になだれ込む。クライマックスが過ぎ去って暫しの静寂。おもむろにトロンボーンが、下降形半音階のグリッサンド……と、音楽用語で書くのも間抜けな話だが、まあ何を意味するかは御想像にお任せしよう。

一九三三年の初演以来大評判だったが三年後にスターリンによって上演禁止。セックス・公務員の揶揄・本人の口真似が登場しては、独裁者が激怒しても不思議はない。シヨスタコは歌詞をマイルドにした改訂版を出したが、近年では原典版の復活上演が相次ぎ、いまや世界のオペラハウスで現代の古典に定着した。

小難しい、と敬遠されるのがオペラ。そりゃ、字幕があつても三時間のロシア語歌劇だからテレビドラマと同じではないけど、でも洋画を映画館で観る程度には気軽だと思ふ。うちの学生なら「チョー、ウケルウ！」と笑い転げるんじゃないかしら。「ムツェンスク郡のマクベス夫人」のような作品こそオペラがブレイクする起爆剤なのではないかと、僕は思ったりする。是非劇場に来てください。



■たなべ・とおる

ドイツの「北ハルツ劇場」専属歌手としてオペラからミュージカルまで出演した後、ベルリンで俳優業にも活動を広げる。映画「ラストサムライ」では渡辺謙の声を吹き替え（独・仏・西語・ドラマ・CM、ベルリン・シエークスピアカンパニー「十二夜」などに出演。二〇〇〇年以降は新国立劇場をはじめ、日本のオペラにも多く出演し、モーツァルト・ワグナー・Rシユトラウス・ドニゼッティ・ロッシーニ・ヴェルディ・プッチーニなどの諸作品で好評を博した。NHK音楽番組からバラエティーまでテレビ出演も多い他、雑誌連載や楽譜編集でも健筆を揮う。国立音楽大学講師。東京二期会会員。

www.tanabe.de